

異世界で『黒の癒^{いや}し手』って
呼ばれています 4

青騎士団の騎士達



ガウ
コウヤク
虎人族という魔族で、
魔王の側近。八公の一人。



ヴァン
第二師団師団長。
リーンの
お兄さんの存在。

シアン
第二師団副師団長。
リーンのお母さんの
存在(注：男性)。



レオン王子
ファンテスマ王国第二王子。
「黄金の戦神」の称号を持つ。



リリアム
[ガイアの息子]であり
「光の曲し手」として、
王都神殿に回われている。



エミリア
コウヤク
兎人族という魔族で、
ガウの妻。愛称ミリー。
優しく綺麗なお姉さん。

主な登場人物

ノエル
コウヤク
翼犬という魔族で、
リーンの眷属。
彼女のことが大好きで、
それ以外の人間には無関心。



ノーチェ
シマ
37代目の魔王、紫魂王。
リーンに名前を与えられ、
破滅の運命から救われた。
彼女に強い愛情を向けている。

リーン・カンザック
カンザック
(神崎美鈴)
22歳のゲームオタクな女子大生。
「ガイアの娘」「黒の曲し手」と
呼ばれ、敬われている。
魔王との対面後、
異世界に残ることになった。

第一章 スローライフは遠く

私、神崎美鈴かみざきみすずは、日本で平和に暮らしていたゲームオタクな女子大生だ。それがある日突然、黒い霧の中から出てきた『腕』に引っ張りこまれ、異世界トリップしてしまった。

幸運なことに、こちらの世界での私のスペックはかなり優秀。ここの言語は問題なく理解できるし、ゲームのように魔法が使えるし、アイテムボックスまである。その上、人やもののステータスも見れちゃう。

おまけに私は回復魔法が使える。まあ、ゲームでは『ヒール』は基本だもんね。

でもこの世界——ガイアの箱庭では、回復魔法の遣い手——『癒し手』——は数が少なくて貴重なのだ。私の回復魔法は強力で、ステータスには『黒の癒し手』なんて厨二な称号がついている。そのおかげで私は、ファンテスマ王国第二王子、レオンハルト殿下の庇護のもと、コルテアという街で癒し手として働き始めた。

この世界では真名——本名のことね——を知られたら、魔法をかけられたり、支配されたりする危険がある。だから私はこちらではリイン・カンザックと名乗っている。

これまで貴族にスパイだと疑われたり、神殿に取り込まれそうになったり、暗殺未遂事件に巻き

込まれたり、私をこの世界に召喚したギューゼルバーン王と対決したりと、いろいろ危ない目にも遭った。だけど、それなりにこの世界に溶け込んで生活しつつ、日本に帰る方法を探していた。

そして、日本に帰れるかもしれないという一縷の望みをかけて、魔界へ向かったのだけれど――

いやあ、怒涛の二日間だったよね。

魔王の側近、八公第五位のガーヴさんが迎えに来てくれて、『名奉じの儀』を無事、終えた。いや、まあ実際のところ、無事じゃなかったけど。だって危うく死にかけちゃったしね。そのあとはこの世界の唯一神ガイアとの対話を済ませたり、ガイアと繋がる存在である魔王ノーチェと話をしたり。帰ってきてからはレオン殿下やみんなに報告。

たった二日間とは思えないほどの濃密な体験だった。

自室に戻って部屋着に着替え、私の大親友、翼犬のノエルにもたれて寝転がると、やっとすべてが終わったと実感できた。

――いつか日本に帰ることができる。

ガイアは約束してくれた。

私の寿命が終わる時、日本のあの日あの場所に、あの時の姿のまま帰してくれる、と。

たとえそれが四〇〇年先、もしかしたら数千年先だとしても、帰りたい場所に帰る方法がある。

そうわかっただけで、ものすごい安心感だ。

……四〇〇年もたったらこちらにすっかり馴染んじゃって、その時はもう日本に帰りたいなんて

思わない可能性もあるかな。

今は、帰りたいと思ってるけどね。

四〇〇年とか数千年とか、そんな長い間魔法を使ったら、元のように日本で暮らせるか、ちよつと考えちゃうじゃん。

日本の常識なんて何もかも忘れてしまっているかもしれない。魔法が使えないことに慣れなくて、怪我をした時について『ヒール』とか言っちゃったら恥ずかしいなあ。

この世界にトリップする時、ちょうど大学卒業間近だった私は、本当ならもうすぐ新社会人としての生活が始まるどころだったんだ。

でも帰る頃には電車の乗り方とかパソコンの使い方すらわからなくて、仕事にならないかも。

まあ、そのあたりはガイアがちゃんとしてくれるだろうとノーチェが言っていた。今までの『縁の者』もみんなそうだったんだから、アフターケアはばっちりのはずだよな。

それに――

背中に柔らかい毛皮の感触がして、ノエルが私の気を引こうとすっぽをゆらゆらさせていることに気付いた。長いふさふさしっぽで、さやさやと私の背中をくすぐっている。……か、可愛すぎる。

そう、私にはノエルがいてくれるのだから。

「ごめんごめん。ノエル。二人きりなのに、ほつたらかしてごめんね」

――主――リイン――守る――大丈夫――

「うん。ありがとう」

私とノエルは心が繋がっている。

だから私が悩んだりすると、ノエルはこうやって私を元気付けようとしてくれる。

ノエル、ありがとね。

そうだよ、日本に帰ってからのことを、うだうだと考えていても仕方ない。

今は、コルテアで無事ノエルと過ごせる幸せを噛み締めよう。

寝転ぶノエルに向き合うように座り直し、お腹や鬢を思いう存分もふもふした。

大きくて温かいし、少し硬めの艶やかな毛並みは、ずっと撫でていたくらい手に馴染む。

ノエルはすごく身体が大きい。翼犬の名の通り、見た目も「翼のある犬」という感じなんだけど、サイズでいうと犬じゃなくて象ほどもある。

体高は二メートル以上。鼻先からお尻までは四メートルくらいの長さで、ふさふさの大きなしっぽが可愛い。ノエルは、いつも私の傍にいてくれる。

『黒の癒し手』を助けるため、ガイア神が遣わした『ガイアの御遣い』という設定になっているノエルは、人々に御遣い様と呼ばれ、『黒の御遣い』なんて称号まで持っている。

そのおかげで、人々にも怖がられずにこうやって一緒に暮らしていけるんだから、この設定を考えてくれたレオン殿下に感謝だ。

……こうして休んでいる間にもすでに新たな事件が起こっていて、数日後に驚かされることになるなんて、その時の私は思いも寄らなかった。

妙に真剣な顔をした青騎士団第二師団師団長のヴァンさん、副師団長のシアンさんに連れられて城に上がったのは、魔王との謁見から数日後のこと。

その日は診療所で癒し手の仕事があり、昼の鐘のあと、私は癒し手仲間の緑姫達と食事をしながら診療所の衛生管理について打ち合わせをしていた。

そこへヴァンさん達がやって来て、レオン殿下から話があると言われ、そのまま城へ。

城の廊下にはやけに騎士達が立っていて、厳戒態勢という雰囲気だ。

レオン殿下の執務室では、殿下とルーク団長、魔術師長さんの三人が、難しそうな顔で打ち合わせをしていた。

私が部屋に入ると、彼らは話をやめて私をまじまじと見る。

ソファに座らされた私に、従者が飲み物を持ってきてくれる。その後、人払いがされてからレオン殿下が話してくれた内容は、何とも複雑な気持ちになるものだった。

いわく、ギューゼルバーンの城が攻撃を受けたそう。

「ギューゼルバーンの城が？」

驚きに目を見開く私に、レオン殿下は頷きながら説明を続ける。

「そうだ。急に空から攻撃されたらしい。城は壊滅。王都の上流ゾーンに相当な被害が出ている」

「いつのことですか？」

「数日前のことだそう。かの城に潜り込ませた間諜が巻き添えで命を落としたゆえ、事態の把握

に時間がかかってしまったが、あなたが魔城から戻ってきたその日で間違いはないであろう」
「いったい、どうしてそんなことに……」
「どうして？ わからぬのか？」
「……え？」

「魔王がおっしゃったのであろう？ そなたを傷つける者は魔王が殺すと」

「まさか……ノーチェが？」

私は、あまりのことに言葉を失った。

幕間 神と獣 ～ギューゼルバーン王～

——あれがいなければ、お前こそが『黄金の戦神』と呼ばれただろうに——
初陣を圧倒的勝利で飾った夜、父王に言われたこの言葉が、彼を長年縛ることになった。

ロドリグ・オーレリアン・ラ・ドウ・ギューゼルバーンの初陣は一九歳の春だった。

初陣で陣頭指揮を執る第一王子——ロドリグの身を案じた父王は、優秀な指揮官を側近として派遣した。傍に控えるその指揮官が刻々と変わる戦況を解説し、どう采配すべきかをロドリグに進言する。

父王の心配とは裏腹に、ロドリグは戦況を読むことにかけては抜きん出た能力を発揮した。
彼は側近の進言をよく理解し、拙くはあるがそれを応用することで、初陣を勝利で飾ってみせたのだ。

彼の勝利は、国民に新しい指導者の誕生という希望をもたらした。

将来のギューゼルバーンに君臨するに相応しい傑物。誰もがロドリグをそう褒め称えた。

彼は統率の才のみならず、容姿にも恵まれていた。

造形の匠が丹精込めて作り上げたかのような、気品溢れる整った顔。

赤みを帯びた波打つ金髪は、日の光を受けると、後光のように彼を飾る。

そんなロドリグを指し、誰もが言った。——まるでファンテスマの『黄金の戦神』のようだと。

神とはガイアただ一柱を表すこの世界で、称号に「神」の名を戴く者はごくわずかだ。

よほどの者でなければ、ガイアへの不敬と見なされてしまう。

だが、隣国ファンテスマの第二王子レオンハルトの称号に異を唱える者は誰もいない。

黄金に輝く長い髪と、見る者を魅了してやまない煌びやかな美貌。

気品と知性に溢れた物腰は柔らかく、この上なく優雅である。

人々を引きつけて感銘を与える強烈な魅力、思わずひれ伏したくなる圧倒的なカリスマ性。

そんな気高き王子は、戦場で見事に采配を振る。

何もかもが、『黄金の戦神』の名に相応しい。

ギューゼルバーンとファンテスマには国交があるとはいえ、ロドリグは実際にレオンハルトの姿

を見たことはない。が、絵姿であれば知っていた。

ファンテスマの民衆に敬愛されるレオンハルトの姿絵は、かの地の市で容易く手に入った。

そこに描かれていた姿は、この絵がどれほど美化されていたとしても、この半分ほど美しければ十分だろうと思わせるほど麗しかった。

一方、ロドリグはどうか。

黄金色の豊かな髪。周囲を威圧する王者の風格。

すべての騎士を己が手足のように動かす、確かな采配。

燦然と輝く常勝の戦歴。

ロドリグもまた、『黄金の戦神』と呼ばれても何ら遜色のない人物であった。

だが、すでにレオンハルトがその称号を得ている。

ロドリグの称号は『天翔る獅子』。

もちろんこれも、最大限の称賛をこめた称号である。

だが、かたや『黄金の戦神』。かたや『天翔る獅子』。

“神”と“獣”。この差が、彼を苦しめる。

ロドリグは、いつもレオンハルトと並び称せられていた。彼を褒め称える言葉には、いつも同時にレオンハルトの称号がついて回る。

あの『黄金の戦神』に勝るとも劣らない……

あの『黄金の戦神』のように輝かしい戦歴……

あの『黄金の戦神』と同じ美しい金髪……

ロドリグはレオンハルトを意識し始めてからというもの、より政に打ち込んだ。

父王の名のもと、反乱の芽を摘むため反対勢力を抑え付けて王家の威信を確かなものとし、他国への遠征を何度も行い、次第に領土を広げた。

だが、ロドリグがどれほど努力しようとも、彼より五〇年以上前に生まれた『黄金の戦神』の名は、いつも彼を苦しめる。

魔力の高い者は寿命も長い。かの王子はロドリグと同じく六等級。あと百年以上は現役で、戦の最前線に身を置き続けるだろう。

ロドリグがギュールバール王となった今でさえ、隣国の第二王子の名声は彼のはるか高みにある。

ロドリグが王位を継いでしばらくたった頃。

彼はファンテスマとの国交を廃止し、かの国との国境に砦を築き、付近の街や村を侵し始めた。

ギュールバールの領土を広げるためだけであれば、力が拮抗しているファンテスマへ干渉をして、いたずらに兵を疲弊させる必要などない。北東側の国境を接する二国、ニルバニアかセシュバを獲得する方がずっと容易いだろう。

だが、ロドリグはかの目障りな先駆者を、己が手で斃したかった。

しかしファンテスマは強く、国境での小競り合いは一進一退を繰り返している。

三年前にはとうとう『黄金の戦神』が騎士団を率いて、国境付近のコルテアに常駐するようになり、戦況はますます厳しくなった。

その上――

ロドリグが異世界から召喚した女は、召喚の魔術に抗って彼の手を逃れ、あろうことかレオンハルトのもとに身を寄せた。

その皮肉な偶然に、ロドリグは嗤う。異世界人すらあいつを選ぶのか、と。

だが、これは彼にとつてレオンハルトを凌ぐいい機会でもあった。

あの『黄金の戦神』の鼻先で、彼の守る異世界人の女を奪い返せば、一矢を報いることができる。うまくいけば、あの男の名を貶められるかもしれない。

そして数人の命を使い、策を講じて一度は異世界の女を取り戻すことに成功したものの、次は魔族に奪われてしまった。あの時、結界を破って侵入してきた魔族の攻撃で、後宮は半壊。

ロドリグ自身も、無事では済まなかった。

魔族に吹き飛ばされ、壁に激突した彼は重傷を負った。倒壊する寸前の建物から騎士達に助け出され、すぐに癒し手の治療を受けることができなかつたなら、彼は今頃死んでいたかもしれない。

ファンテスマで広まる『ガイアの奇跡』を聞いて、ロドリグは激昂した。

あの女が『ガイアの娘』だというのは、まったくのでたらめである。あれはただの異世界人だ。

魔族が動いたのも、ガイアの意味などではないだろう。

レオンハルトめ、うまく神話を利用して民衆を味方につけるとは。

ガイアの名を使ったその茶番が確かな効果を上げていることにレオンハルトの小賢しさを感じ、また一歩先んじられたと臍を噛む。

……負けるものか。

もつと強く、もつと賢く。あれを超えるまで。

もつと果敢に、もつと狡猾に。あれをこの手で殺すまで。

高みから見下ろすあの男の髪を掴んで引き摺り下ろし、地べたに這いつくばらせ、土の味を教えやる。

そして、『黄金の戦神』の称号が真に相応しいのは誰か、彼奴に思い知らせてやるのだ……

ロドリグが苛々と玉座の肘掛けを握り締めたとたん、異変が起きた。

「陛下！」

傍に控える魔術師が天井を見上げる。

焦ったようなその声を聞くまでもなく、ロドリグも感じた――とてつもない魔力の波動を。

彼を安全な場所へ転移させるため、魔術師が急いで魔法陣を展開させる。

「急げっ……くっ」

せっぱつまつた騎士の声に、地鳴りのごとき震動が重なる。

危機に瀕した身体を感じる、極限まで引き延ばされた時間に、様々なことが起こった。ガラス窓の外に閃光が走ると同時に、巨大な鋭い刃が城の境界を突き抜け、すさまじい爆音が聞こえた。

ロドリグの周りを転移の魔法陣が包む。

魔法陣の光が彼に纏わりつくのと、天井にひびが入り、ガラガラと崩れ落ちてくるのはほとんど同時であった。

生身の身体に、容赦なく瓦礫が降り注ぐ。

急速に干からびていく魔術師の手が空を掴んだ。魔法陣に魔力が満ちる。

転移の浮遊感と酩酊感、そして瓦礫に打ちのめされる激痛の中、ロドリグは考える。

——これで終わりなのか。

——何が間違っていたのか。

ああ、レオンハルトに敵わなかった……

それが、意識を失う間際の、ロドリグの想いだった。

幕間 魔王の鉄槌（ノーチェ）

ガイアとの対話を終えたリイーンを、ノーチェはコルテアにある彼女の屋敷へ送り届けた。リ

イーンの屋敷では、多くのヒューマン達が心配しながら彼女の帰りを待っていた。

無事に戻った彼女を迎える親しげなヒューマンの様子に嫉妬しながらも、ノーチェは何も言わず、ただ、彼女が自分にとつて——紫魂にとつて唯一無二の者であると宣言するだけに留める。

「リイーン。もし何かあればすぐに私の名を呼べ。そなたが呼べばすぐに駆けつけよう。そなたは我が半身。傷つける者は私が殺す。努々それを忘れるな」

そう言い残したノーチェは魔城に戻らず、そのまま別の場所に転移した。もう一つ、やらねばならぬことを果たすために。

空中高くに留まり、そこから地上を見下ろす。

足下には城を中心とした大きな街が広がっている。ギューゼルバーンの王都だ。

ヒューマンの城——リイーンを傷つけた者の城。

リイーンがガイアのもとに飛ぶ直前、息もできずに震える彼女の様子は尋常ではなかった。おそらく何か心の傷を抱えていたのだろう。

思えば、夢の中で会った時、彼女はひどく怯えていることがあった。ノーチェに縋り、「助けて」と泣いていたリイーン。きつと恐ろしい目に遭い、傷つけられたのだ。

ガイアのもとに向かったリイーンの気配が完全に消えたあと、その場に残された彼女の眷属である翼犬に、この城で彼女がどのような目に遭ったのかを聞き出した。

翼犬は主以外には従わぬ生き物だが、魔王の王気に抵抗できる魔族はいない。

——許せぬ。

我が『縁の者』の身に触れて、あまつさえ怪我を負わせるなど。

『縁の者』にガイアが提示する選択肢は、すぐに元の世界に帰るか、あるいはこの地で寿命を迎えたのちに帰るかの一択だ。

今までの『縁の者』のうち、すぐに界を渡って帰りたいと希望した者は、すべて何かしら心に傷を負っていた。

他者を殺すことに厭いた者。

利用され搾取され、心の擦り切れた者。

囚われて拷問を受けたたり、無理やり手籠めにされたりした者。

幸いなことに、危ういところでガーヴに助けられたため、リイーンは凌辱されたわけではない。

だが女性にとつて、この手の被害によって生じる心の傷は深いものである。

もし彼女が今すぐに帰りたいと願うほどこの地を厭うているなら、引き留めることは叶わない。

たとえそれにより、ノーチェが身を切られるような辛い思いをすとしても。

リイーンはガイアの手により、ここで会った人物も起きた出来事もすべて忘れさせられ、かの地で平和な日常を過ごすだろう。

——私のもも忘れて……

ノーチェは、かの地で誰か他の者に微笑みかけるリイーンを想像して、唇を噛み締めた。

彼としては、リイーンにこのままこの地にいてもらいたい。

もつと言うなら、彼の半身として数千年の長き刻を共に過ごしてもらおうことを望んでいる。

だが、ヒューマンの精神力は数千年の長い寿命に耐えられないのだ。

いくらノーチェがそう望んでも、無理強いはいできない。そんな無体をすれば、すぐに精神が破綻してしまう。

リイーンが心からノーチェと共に生きたいと願わなければ、彼女はいずれ心を病み、長き生の途中で魂ごと消滅してしまうこともありえる。

決めるのは彼女だ。

ノーチェは半ば諦めの境地で、リイーンがガイアのもとから戻るまでの時間を過ごした。

しかし、彼女はこの地に残ることを選んだ。

一番の理由は眷属との契約のためだが、それでも残ると決意したということは、この箱庭での経験が辛いだけのものではなかったからだろう。

その報告を聞いた時のノーチェの喜びは、筆舌に尽くしがたい。

それからの彼は、リイーンを我がものとするために必死だった。

辛い彼女には、まだ心に決めた相手はいない。

であれば、ノーチェが求愛を躊躇う理由はない。

奥手で未だ恋を知らぬリイーンは、彼の求愛に戸惑いつつも、気持ちを受け入れてくれた。

今すぐに半身となることは叶わなかったが、ノーチェを「カレシ」にしてくれたのだ。

リイーンにはこれからも、このガイアの箱庭で幸せに生きてもらいたい。できれば自分の傍で。

そのために、リイーンを傷つけるものから彼女を守らなくてはならない。

——我が半身を傷つける者は私が殺す。

リイーンには気付かせなかつたが、ノーチェは翼犬の記憶を見て以来、彼の『唯一』に触れた者に激しく嫉妬し、激昂していた。

もう他のどんな男の目にも触れさせぬために、リイーンを魔城の彼の居室に閉じ込めるべきかと悩むほどに。

幾重にも張った結界の中、ノーチェとリイーンしか存在しない世界。

その誘惑は甘美で、彼はひととき、この魅力的な幻想に酔った。

だが自由を望むリイーンを閉じ込めれば、彼女はすぐに枯れてしまうだろう。リイーンは野の花だ。好きにさせてやりたい。

何、簡単なことだ。

彼女を傷つけるもの、彼女を誘惑するものがあれば排除すればいいのだ。

そう、つい先ほどファンテスマで宣言した通り、リイーンを傷つけた報いを受けてもらわねばならぬ。

我が妻、我が半身を穢れた身で組み敷いた報い。

王の命ひとつ程度では贖えぬ。

ちようどいい、今後の見せしめとなつてもらおうとしよう。

ノーチェはゆつくりと右手をかざした。



「消え失せる」

彼の足下に、巨大な暗き閃光せんこうが放たれる。

それは、半円状に街を覆う結界を簡単に突き抜け、城にかかる結界も引き裂くと、主城しゅじょうの中心に呑み込まれた。

建物の中から破裂するように吹き飛ぶ。一瞬遅れて爆音と、ヒューマンの悲鳴と怒号が聞こえた。たくさんの方達の気が大地に戻るのがわかる。

これでリインに手を出す者はいなくなるだろう。

そろそろ八公はちこうとの謁見えつけんの時間が迫っている。

結果を見届けることなく、ノーチェは魔城の居室に転移した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「まさか……ノーチェが？」

——ノーチェがギューゼルバーンの王城を攻撃して、城は壊滅かいめつ。多数の被害者が出た。

レオン殿下から告げられた内容はあまりにも衝撃的で、うまく頭が働かない。

私の混乱をよそに、レオン殿下はなおも続ける。

「間違いないだろうな。王都の結界の上からこれだけの被害を出せる攻撃など、魔王か八公くらいにしかできぬ」

ええ？ でも何故？ ノーチェにギューゼルバーンの話はしていないのに。

そういえば攫さらわれた直後、夢の中でノーチェに助けを求めたっけ。

でも、誰に何をされたかなんて話してないよ。

と、そこまで考えた時、ノエルの念を感じた。

——ノエル——魔王に聞かれた——魔王——ノエルの記憶見た——

ノエルの？ え？ いつ？ ああ、私がガイアのもとに行っている間？

私、あの時サド王のことがフラッシュバックして息がでないくらいになってたから、それでノーチェはノエルに、何があったか聞き出したのね。

記憶を見たということは、ノーチェは私がいっつに手のひらを切られたことも、キスされたこともみんな知っていたんだ。

押し掛かってきたサド王の体重と酷薄こくはくな眼差しまなざしを思い出してぞっとする。震えそうになる自分の身体を両手で抱き締めた。

ノーチェにあんな姿を見られたなんて——

それで、ノーチェは怒ってギューゼルバーン王を殺そうとした？

でも、だからっていきなり城を攻撃って。きつと、たくさん人が死んだり怪我したりしているはずだよ。

私のため？ 私があんなことをされたから？ 私の……私のせいで？

私のせいで——どれだけの人が死んだのか。

あまりのことに身体が震えた。うまく働かない頭を必死で動かす。

そう、まず……まずはノーチェと話さなきゃ。

「すみません、殿下。魔王と話をしてもいいですか？」

「どうやって？」

「呼べば駆けつけると言っていましたから、呼んでみます」

レオン殿下に了承をもらい、魔王の転移による結界の揺れに護衛達が混乱しないよう周知してから、用意された部屋に入った。

魔王様を呼びつけるなんて畏れ多いことかな、とか、魔王なんだから忙しいんじゃないかな、とか思いつつも、これはちゃんと話し合っておかなきゃいけないことだから、と自分を納得させる。

離れた場所において、名前を呼びかけるのは初めてだ。

ホントに呼びかけるだけで聞こえるのか不安になりながらも、そつと彼の名前を口にした。

「ノーチェ？」

とたんに、膨大な魔力が目の前に生まれた。城の結界がぎしぎしと悲鳴を上げる。

気が付くと、私はノーチェに抱き締められていた。

胸元にぼすんと顔を埋める形で抱き込まれた私は、ゆったりとした彼の服の袖に身体を覆われている。全身をノーチェで包まれているようだ。

おでこの上に頬が寄せられ、いとおしげに頬ずりされた。

見上げると、上機嫌に微笑みを浮かべるノーチェの顔があった。

「やっと呼びかけてくれたな」

「ノーチェ」

「そなたに名を呼ばれることはこの上なき喜び。もう一度呼んでくれ、リイーン」

低音を響かせるなつ、色つぼく耳元で囁くなつ。こ、こら、髪にキスをするなつ。

どきんと跳ねる心臓をごまかすために深呼吸をする。ノーチェのペースに巻き込まれるな。がんばれ恋愛初心者。

「ノーチェ、ちゃんと聞いて」

精いっぱい腕をつっぱって、やっと距離を取る。ノーチェはしぶしぶ私の背中に回っていた腕を外した。

「なんだ。私に会いたくて名を呼んだのだろう？ 何を怒っている？」

「ノーチェ、ギューゼルバーンの王都を攻撃した？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

何てことないようなノーチェの言葉に、私は絶句してしまふ。

「……どうかしたのかって」

「言ったであろう？ そなたを傷つける者は私が殺す。かの国の王を殺すのみでもよかったが、それでは見せしめになるまい。ゆえに城ごと纏めて破壊した」

「駄目だよ、そんなことをしたら。たくさんの人が死んだんだよ。関係ない人もいっぱい死んだり怪我したりしたはず。そんなことをするのはやめて」

「ならぬ。そなたは我が半身。そなたを傷つける者を許すわけにはゆかぬ」

「私が『縁の者』だから？」

「かの地の王はそなたを傷つけた。あまつさえそなたの身に触れ、口づけ組み敷いた。ガーヴの助けが間に合わねば彼奴に穢されていただろう。私がそれを許すとしても？」

その紫の瞳に宿る苛烈な嫉妬と怒りの炎が怖くて、思わず後ずさる。

そう……だった。

魔族は嫉妬深い生き物だって、シアンさんが言っていた。レオン殿下も、魔族との婚姻は難しいって。

二人の言葉の意味を、ちゃんと考えていなかった。

この前会った時のノーチェは、＼カレシ＼になれたことで上機嫌に笑みを浮かべ、子供みたいに私に抱きついていて。だけどあの時すでにギューゼルバーンのことを知っていて、実はすんごく怒っていたんだ。そんなことおくびにも出さなかったのに。

ちよつと天然で可愛いって思ってたけど、一筋縄ではいかない人だった。

さすが魔王。さすが八〇〇歳超え。想像以上に複雑な精神構造をしている。

……ノーチェってヤンデレかも。

でも、魔族なら当然のことなのかもしれない。

数千年の生涯の間たった一人を愛し続ける彼らだからこそ、私があのだ王にされた仕打ちを許せないのだろう。

私のせいで、ノーチェはギューゼルバーンの城を攻撃したんだ。

——私にどれだけの人の命を背負えと言うの。

そういえばガイアも、

『君が憎いならギューゼルバーンを滅ぼしてもいいし、ファンテスマの王に成り代わってもいい』
って言っていた。

でも『スキャン』の魔道具を作って診療所に置くのは駄目だって。

人の命を数百単位で殺すより、人の技術や知識を向上させる方がいけないことなの？

箱庭にとつて、命というものはそれほど軽いのか。

もしくは命が重すぎて、増えすぎると支えられないから殺すのか。

わからない。私は、どうすればいいんだろう。

もし私がまた危険な目に遭えば、ノーチェは今回みたいに、敵のいる区画を纏めて壊してしま
うの？

心の奥から恐怖が湧き上がる。がくがくと膝が震えて、立っているのがやっとだった。

「だめ、だよ。ノーチェ。私、そんなの背負えない」

「そなたが背負うことはない。これは私の——」

そう言いながら近付こうとするノーチェだが、私は後ずさった。

「やだ。こないで」

「リイーン」

「やだ。私、やだ。こんなの、やだ。もうやめて。私……」

後ずさったことで開いた距離は、ノーチェの腕に抱き寄せられてあつけない詰められる。両手で抱き締め、頬を私の頭に載せて全身を包み込むように。縋りつくように。ノーチェの腕の力は強く、それだけで泣きそうだ。

「そなたは私のものだ」

「私が『縁の者』だから、ノーチェはそんなことをするの？ 私が傷つけば、また簡単に人を殺してしまうの？ ノーチェにとつて、ヒューマンつてそんなに価値のない存在なの？ ノーチェは箱庭のすべてを支えているんでしょう？」

「私はすべてを支えている。魔族もヒューマンも動物も変わらぬ。どれも私が支える生き物。一つとして要らぬものはなく、一つとして特別なものもない」

「だったら」

「だがそなたは別だ。そなたを失うわけにはゆかぬ。ニホンとやらに戻ったあとのことは私には感知できないが、この箱庭にいるそなたが少しでも傷つけば、私とて冷静ではおられぬ。リイーン、そなたはかよわい。我ら魔族と比べると、触れることすら憚られるほどのひ弱さだ。『半身の契約』が済めばそなたもヒューマンの理から外れ多少は強くもなるが、今のそなたの脆弱な身体が私には恐ろしくてならぬ。よいか。そなたは無事に生きろ。今後は毛筋ほどの怪我也許さぬ。そなたの安全がこの箱庭の安寧に繋がることを努め、忘れるな」

私を抱き締めるノーチェの腕に力がこもる。

ああ、そうか。

この人は——怯えているんだ。

彼は一度、自分が魔力を解放したせいで死にかけて私の姿を見ているんだった。

私と二人きりの時のノーチェは、とても魔王とは思えない純粹さで、母親を慕う子供かと思うほどのまつすぐな愛情を向けてくる。

だから、ノーチェがこの世界に君臨している王であることを忘れそうになってしまうけど、彼は掛け値なしに『魔王』なのだ。

私を傷つけた者への復讐のためなら、無関係な人々も殺す。

私が死ねば、ノーチェは狂って世界を破壊する。

今までの『縁の者』はみんな、こんな重圧に耐えたの？

正直なところ、ノーチェがサド王を殺しただけなら、何とも思わなかったかもしれない。

日本にいた時の倫理観では、きつと、どんなにひどいことをされても、報復で人を殺すなんてとんでもないって考えただろうに。

私はこの世界に来て、人の死を見すぎたのかもしれない。

たぶん「私のために人を殺すなんてやめて」とは言っただろうけど、だからといって罪悪感に囚われたりはしなかったと思う。

だけど、これは予想の斜め上すぎて。

私のせいで失われた命の多さに、眩暈がしそうだった。

何と言つていいかわからなくて、私はただノーチェに抱き締められたまま茫然としていた。
——今の私には、ノーチェを抱き締め返すことはどうしてもできなかつた。

ノーチェと共にレオン殿下の執務室に戻ると、殿下がソファから立ち上がり、優雅な動きでその場に跪いた。

レオン殿下が膝を折る姿なんて初めて見た。

周りに控えるヴァンさんや他の青騎士達も跪き、騎士の礼を取っている。

当然のようにその礼を受けたノーチェは、レオン殿下に冷たい目を向けて口を開いた。

「ファンテスマの王の子か。発言を許そう」

「お初にお目にかかります。ファンテスマ王国第二王子、レオンハルト・フォン・デュッセル・ファンテスマと申します。紫魂王におかれましては、ご機嫌麗しく」

「挨拶はいらぬ。ギューゼルバーンの王都は混乱しているだろう。そなたらにはずいぶんと都合のいい結末であろう。せいぜい利用するがよい」

皮肉な内容を淡々と言うノーチェに、レオン殿下はほんの少し口の端を上げる。

「恐れ入ります」

「リイーンは我が半身。今までよく守ってくれた。リイーンは『ファンテスマのガイアの娘』であることを望んでいる。刻が満ちるまでは私もそれで構わぬ。が、あまりお前達が欲をかくようなら、我が半身は魔城へ連れ帰る。心せよ」

連れ帰るという部分に、私はぎよつとしてノーチェを見たけれど、二人とも私の動揺には気付いてくれない。

「しかと。肝に銘じておきましょう」

「三日だ。それで体裁を整えるがよい」

「温情に感謝いたします」

ノーチェは私を振り返ると艶やかに微笑み、髪に口づけてから魔城へと転移した。

ノーチェが消えたあと、私はその場に座り込んでしまった。

私を支えようとしたヴァンさんを制し、レオン殿下が私の手を取ってソファに座らせてくれた。殿下もそのまま私の横に座る。

「大丈夫か」

「……何と言つていいのか」

「紫魂王のなかつたことは正しい。魔王の半身となる者に手を出して、無傷でいられるなどありえぬ」

「だって、私はまだノーチェの半身になったわけじゃないです。なのにこんな」

「リイーン。そなたはまだ理解できておらぬな」

レオン殿下はそう言うと、よくお聞き、とまるで子供に言つて聞かせるように話し出した。

「リイーン。紫魂王との約定は何であつた？」

「約定、ですか？」

「そうだ。王の半身となるかどうかは、そなたの寿命が尽きるまでに決めればよいと、そうであったな？」

「はい、そうです」

「それだけではあるまい？」

「え？」

わけもわからずレオン殿下の顔を見上げる私を見つめ返し、殿下はまた口を開く。

「落ち着いて思い出してみよ。そなたの四〇〇年にわたる寿命まではどうすると言ったのだ？」

「ですから、私はまだ恋愛とか考えたことがないので、ゆっくり知り合っていきたいと。ノーチェも、それまでは先を望まないから傍にいてほしいって……」

「つまり、四〇〇年間は半身の契約を先延ばしにしても構わないが、リイーンが紫魂王の想い人であることに変わりはないのだろうか？」

「えっと。だからカレシ……って、えーっと。男友達の延長というか、軽いお付き合いというか」

カレシは翻訳されないから言い直した。

私の話す言葉や聞く言葉は、この世界の言葉に自動的に翻訳される。おそらく異世界召喚時の特典のようなものだと思う。だけど、この世界にないニュアンスの言葉は、そのままの音で発音されてしまうのだ。

「リイーン。魔族相手に『軽いお付き合い』などというものは無理だ。魔族は情の深い生き物だと

申したであろう。妾婦しよふや一夜の遊び相手ならともかく、半身の契約を結びたいと願うほどの相手を、自ら手放すようなことは決してない」

あれ？ カレシってお試し期間じゃないの？

もしかして、ノーチェがカレシじゃなくなる時は、私が日本に帰るか半身の契約を結ぶ時？

じっくり知り合っていきたいということには納得してくれただけ、付き合いってみてやっぱり違ってから別れますっていうのはナシ？

……そういえば。

『それでよい。四〇〇年、そなたのカレシでいよう』

そう言った時のノーチェは、すんごく嬉しそうだった。

私が理解し始めたことがわかったのか、レオン殿下は駄目押しのように話を続ける。

「魔族がこれと決めた者と別れることはありえぬ。そなたはすでに紫魂王の恋人であり、半身候補だ。婚約者と言い換えれば、そなたにもわかりやすいか。恋人という立場が変わるのは、そなたが寿命でかの地へ帰る時か、半身の契約を結ぶ時だけだ」

魔族にとつての「恋人」は、婚約者みたいなものなんだ。

そんなことノーチェは言っただけじゃん。

それがわかっていたら、ちゃんとお友達から始めましょうって言ったのに。

……あ。

『カレシっていうのは恋人のことです』

あの時、自分でそう言った。私。カレシは恋人だつて。

私の考えるカレシと、ノーチェの考えるカレシはまったく別のものだった。

魔の力の強いこの世界では、言葉の効力はとても高い。

真名にかけて誓ったわけではないし、カレシにしてほしいというノーチェの言葉に魔力はこもってなかったから、ちゃんとした契約とは違う。

言うなればただの口約束。でも私は「ヒューマンの寿命まではカレシ」だと認めてしまった。

だから、ノーチェはもう私と婚約しているつもりなんだ。

そう……だった。

魔族は嫉妬深い生き物だつて、魔族との婚姻は難しいつて。そういうことだ。

ちゃんと考えていなかった。

つて、さつきも同じことを思ったのに。

やっぱり私、なんにも、まるつきし——

……わかつてなかった。

その日、私はどうやって自分の屋敷に帰ったのか、うつすらとしか覚えていない。

ヴァンさんに促されるままノエル（うなが）の背に乗り、屋敷に戻つてからは侍女のクリスさんとマリアンヌさんにお風呂に入れられ、温かいミルクにお酒を少し入れたものを手に寝室に押し込められた。

それを飲んだかどうか、そしていつ眠つたのかは、ほとんど記憶に残っていない。

いつの間にか視界に広がっていたありえない光景に、ああ、これは夢なんだとぼんやりとした頭で考えた。だつて、私は今、生身で空に浮かんでいるのだから。

私の眼下に広がっているのは、コルテアよりも大きな街。

高くそびえる荘厳な主城。複雑に入り組んだ道で繋がるいくつもの塔。その城を取り囲むように作られた堅固な城壁。その周りには貴族の屋敷が立ち並ぶ。

馬車や貴族らしき人々。要所要所をきびきびと巡る騎乗した騎士達。

私はそれらを上空から眺めている。

それにしても、初めて見る光景のはずなのにやけにリアルだ。かなり高いところに浮かんでいる割に細部まで良く見えるのは、夢ならではのご都合主義つてやつか。

頭の片隅で、そんな風に冷静に考えている。

でも、私の心を圧倒的に占める感情は、怒りだ。

怒り、焦燥、嫉妬、怒り、自己嫌悪、怒り、諦観、怒り、怒り、怒り……

——と、手が勝手に動く。かざした右手から暗き閃光が放たれた。神の怒りを具現化したかのような大きな光が主城へと呑み込まれて、建物の中から爆発するように飛び散った。人を——城を——街を、容易く引き裂いていく。

爆発音も、悲鳴も、すべてがリアルだった。

「やめて——！！！！！！」

叫んだ瞬間、飛び起きた。

どくどくと激しく脈を打つ胸を自分で抱き締める。

ベッドの横からノエルが大きな顔をこちらへ寄せて、気遣うように鼻を押し当ててくる。

——主——リイーン——大丈夫——

ノエルの念に答える余裕もなく、ただ、痛いほど脈打つ胸を抱き締め、空気を求めてあえぐ。

「リイーン様っ」

クリスさんと、それから少し遅れてヒュージさん、ジュエさんが部屋に飛び込んできた。

「何事ですか!」

「ご無事でしようか」

剣を手に飛び込んできた騎士達の姿を見て、夢の中で発した悲鳴は、現実でも口から出ていたのだと気付いた。

「すみません。夢、みたいです。怖い夢を見ちゃって……ごめんなさい」

震える声でそう謝る。心臓の痛みも鼓動も、まだ治まりそうにない。

「リイーン様……」

気遣ってくれるクリスさん達に、迷惑をかけてすみませんと再び謝り、もう大丈夫だからと言って下がってもらった。

あれは……ギューゼルバーン?

先ほどの破壊はノーチェの目から見た風景だったのか、それともただの夢なのか。判断がつか

ない。

でも——

目が覚めた今も鮮明に思い出せる。心の中が怒りに染まる感覚と、容易く行われた破壊。

ノエルの毛皮に抱きつき、ひたすら撫でながら考える。

ギューゼルバーンのことや、ノーチェのこと、『縁の者』の責務や、この世界のこと、いろいろ——本当にいろいろ、考える。

答えは……何も出なかった。

「さて、リイーン」

翌日、もう一度レオン殿下の執務室に呼ばれた。ヴァンさんとシアンさんも同席する中、ソファに座る私に、レオン殿下は話し始める。

「そなたが落ち着くまでもう少し待っていてやりたいが、そうも言っておられぬ。王は三日とおっしゃった。明後日には第五位ガーヴ殿より、コルテアに通達があるだろう」

「通達、ですか?」

「そうだ。魔王は見せしめの意味も含めてギューゼルバーンを攻撃なさった。であれば、誰が何のために攻撃したのか、明らかにせねば意味があるまい。『黒の癒し手』は紫魂王の半身候補。手を出せば魔界が動く。しかと心せよ、と八公が各方位へ通達をなさるだろう」

そうか、私に危害を加えたからこうなったんだと、箱庭中に知らせなくちゃいけないものね。

できなきゃ、見せしめ”にならない。

……そのために失われた多くの命を考えて、また身体が震えそうになるのをぐっと堪える。今、私が悩んでいても何にもならない。

それにしても、“通達”なのね。言葉の意味的に、上位組織から下位への連絡事項、というイメージがある。

そういえば、ガイアが昔の『縁の者』の話をした時にも『魔王の眷属達がヒューマンの国の指導者達に布令を出した』と言っていたような。

こういう話を聞いたたびに、やっぱり魔界はガイアの箱庭の頂点なんだと思う。直接ヒューマンの国を支配しているわけではないけど、魔界の立場は圧倒的に強い。

この世界は魔界が中心にあり、その周囲をヒューマンの国が取り囲んでいる。

魔界には、中心にある魔城を囲むように八公の城が等間隔に並んでいて、ヒューマンとの折衝はその方角を守る八公がそれぞれ執り行っているんだそうだ。

ファンテスマは大地の北西から南西まで広がる大国だから、八公の管轄で言うところ七位、二位、五位の三区画に跨っている。

南西のコルテアは第五位ガーヴさんの管轄区域になるため、魔城からの通達もガーヴさんを通じて行われるのだとか。

ちなみに、ファンテスマ王都のある西は第二位、マノウヴァという人の管轄で、王都へはその人が連絡してくるだろうとレオン殿下が教えてくれた。

「王は、そなたが『ファンテスマのガイアの娘』でいいとおっしゃった。であれば、我らとしても、このまま『ガイアの娘』として扱わせてもらうつもりだ。そなたが異世界人であることは、王家のごく一部の秘となるうな」

私が異世界人であることを知っているのは、今のところレオン殿下、魔術師長、ヴァンさん、シアンさん、そしてガーヴさんとミリーさん。魔王であるノーチェと八公達も知っている。

「以前の『ガイアの奇跡』を少し書き換える必要がある。『ファンテスマのガイアの娘』である『黒の癒し手』が、ガイアの意志により紫魂王の半身候補として選ばれた、とな。そなたにはファンテスマと魔界の架け橋になってもらいたい」

『ガイアの奇跡』とは、私がギューゼルバーンから助け出されてすぐに発表されたもの。ギューゼルバーンが『ガイアの娘』を迫害したことをガイアが怒り、大地が揺れ、神の御遣いが私を助けてくれた。御遣いはそのまま私の眷属となった……と、そんな感じ。まあ全部レオン殿下の創作なわけだね。

これ一つで、『ガイアの娘』を誘拐されるという失態を演じた青騎士の名誉挽回、私の『ガイアの娘』認定、ノエルの存在の公表とコルテアでの自由の確保、神殿対策、王の嫁フラグ対策を全部やってしまったレオン殿下はすごい。

今回はそれに加えて、ガイアが私を魔王の半身候補に決めたことになるんだろう。さしずめ『ガイアの奇跡 第二章』といったところかな。

……まあこれは実際のところ、まんざら嘘じゃない。

だつて私は『縁えんじの者』だもの。

『縁えんじの者』は、魔王の魂たましいに沿う魂を持つ異世界人のこと。魔王に名を付けることができるのは『縁えんじの者』だけなのだ。

名を得ることのできなかつた魔王は数百年で狂化。名を得た魔王は数千年生き続け、さらに、『縁えんじの者』がずっと傍にいれば、その寿命は五千年を越す、と言われている。

五千年以上の平和のためにも、ガイアは私にノーチェの半身でいてほしいって思っているんだろ
うな。『好きにしていよいよ』って言いながらも、しつかり『紫魂を頼むよ』って言ったものね。
ああ、そういえば、ガイアが私に『君の寿命は四〇〇〇年ってところかな』って言った直後、『も
しかしたらもっと長くなるかもね』って、やけに含みのある言い方をしていた気がする。

あの時、ノーチェが私に半身となって欲しいと言いつ出すことが、ガイアにはわかってたのね。
なんだか、全部ガイアの思い通りって感じがして悔しいな。

「さて、リイン」

レオン殿下は居住まいを正すと、こう言った。

「今この時より、そなたは魔王の半身候補として扱われる。ヴァンやシアン達も、今までと同様の
態度でそなたに接するわけにはいかぬ」

レオン殿下は私の顔を見ながら、言い聞かせるように続ける。

「よいな、心せよ。今後、皆が『ガイア神と繋がる者』『箱庭の心を支える者』『至高の存在』であ
る魔王の伴侶としてそなたを見る。そなたはこの箱庭で、魔王の次に高貴な存在となったのだ」

「今まで通り接してくださいというのは、無理なお願いなんでしょうか」

ノーチェは魔王様だけど、私はただの異世界人。私自身はちつとも偉くない。急に高貴な存在だ
なんて言われてもね。

「人の目のない場所であれば、多少はくだけた言葉遣いでも構わぬ。が、あくまでも“多少は”だ。
異世界人のそなたにはわかりにくいだろうが、我らにとつて魔王は特別な御方なのだ」

とはいえ、私は“半身”ではなくて“半身候補”。だから魔王妃に対するような正規の礼が必要
なわけではない、とレオン殿下は続けて説明してくれた。

つまり、今の私は公的にはただの平民。だけど、魔王が半身にしたいと考えているほどの存在だ
から、ヒューマンが粗雑そざつに扱っていいわけがない。

そこで、公的な身分は関係なく、ヒューマン間においては私をファンテスマ王家に次ぐ立場とし
て扱うことに決めたそうだ。魔族達が同席する場合には、王族も私に敬語を使うことになるらしい。
私を傷つけると魔王が怒る。そうなればヒューマンの国なんてひとたまりもない。

うん。私的にわかりやすい喩えたとで言うなら、私は核兵器の遠隔スイッチみたいなもの。

私に不用意に触れれば、ノーチェという核兵器が投下される。

自然、扱いは最大級に気を使われながらも、実際の立場は低い。こんな何とも中途半端な立ち
位置になっているのだ。

私自身も『ガイアの娘』、『黒の癒し手』として人々から尊敬されているし、人気も高い。

だけど、コルテア以外に住む人々は、私を直接見たことがないのだ。他の地域の人からすれば、

ファンテスマの一地方であるコルテアに現れた、物語の登場人物のようなもの。

実際の私は知られていないのに噂ばかりが先行していて、そこに今回の『魔王の半身候補』の通達だ。

……不安だなあ。

私は傍に立つヴァンさんとシアンさんを見上げた。彼らは目が合うと、私を気遣いつつもそっと頷く。

「魔王との関係を公にした以上、貴女はもう『ただのリーン』ではいられません。わかりますね、リーン殿」

シアンさんの言葉に続けて、ヴァンさんも口を開いた。

「俺達は騎士です、リーン殿。今までも、これからも。我らは変わらず貴女の盾です」

二人の言葉遣いが変わった。けど、その目には私への変わらぬ愛情がある。

貴族の屋敷に閉じ込められた私を助けに来てくれた時も、大神官とやり合った私を守ってくれた時も。ギューゼルバーンのサド王に攫われた時も、トラウマで倒れた時も。

ずっとずっと、彼らは変わらず私を守ろうとしてくれた。私の身体だけじゃなくて、心も。

関係は少し変わってしまったけど、やっぱりヴァンさんはお兄ちゃんだし、シアンさんはお母さんだ。それはきつと、ずっと変わらないと思う。

「わかりました。ありがとうございます、レオン殿下。ヴァンさん、シアンさんも」

偉大なるガイアは『黒の癒し手』に天啓を授けた

ガイアは告げる

魔界へ行け、と――

『黒の癒し手』は運命に導かれ、魔界へと向かう

大地の中心 大地の要 八芒星に守られしガイアの源

神々しくそびえ立つ宿木

宿木の御許 ガイアの導きにより『紫魂王』と『黒の癒し手』は出会おうべくして出会う

ガイアは告げる

『黒の癒し手』よ

箱庭の心を支える者 『紫魂王』を支えよと

『黒の癒し手』が傍らにあれば『紫魂王』の御世は幾久しく続くであろう

ファンテスマのガイアの娘は魔界とヒューマンの国を結ぶ要とならん、と――

『ガイアの奇跡 第二章』は小話語りや吟遊詩人によって伝えられ、コルテアだけではなく、他の街や村にも速やかに広がっていくことになる。

この話は、まずコルテアの街で大歓迎された。その効果は凄まじく、コルテアの人々の反応は以前の奇跡を広めた時よりも、もっと熱狂的だった。

これももし、私の相手役となるのが魔王以外の魔族の誰かとか、他の国のヒューマンとかだったなら、ファンテスマの国民は納得しなかっただろう。

国民感情としては、ご当地ヒロインである『黒の癒し手』が、他の国の者を好きになるなんて許せないよね。裏切られたと考える者もいたかもしれない。

圧倒的な人気や高すぎる好感度は、ちょっとしたことでも急降下する。

だけど、相手が魔王なら話は別だ。

魔王はガイア神と繋がる唯一の存在。

だから、『ガイアの娘』である私とのセットは神話としても申し分なく、ヒューマンにも受け入れられやすいようだった。

みんな、自分の住むこのコルテアから魔王の伴侶候補が出たことを誇りに思っているらしい。

『黒の癒し手』の評判は、より一層高まった。

状況が落ち着くまで、私はまた城の客間で軟禁状態だ。なぜなら、屋敷だと何かあった時にレオン殿下と打ち合わせができないから。もちろん診療所でのお仕事も休み。

レオン殿下に呼ばれたり、シアンさん達が報告に訪れてくれたりする時以外は、広くて居心地のいい客間でノエルと二人、何をするでもなくただらと過ごしている。やることといえば、時々クリスさん達に頼まれて新しいドレスの試着をするくらい。

シアンさんの話では、私の屋敷にはいろんな貴族達から、魔王の半身候補となったことへのお祝いの手紙と共に、絵画や彫刻、宝石や装飾品なんかがたくさん届けられているのとか。

面会の希望や、パーティや茶会への招待なども増えたそうだけど、それはレオン殿下の方でみんな断ってくれているらしい。

贈り物は、青騎士と魔術師で怪しいものがないか調べてから私のところに来るんだって。と言っても、私には美術品の価値なんてわからない。きっと誰かが管理して、部屋に飾るなりしてくれるんだろう。

何で魔術師が検査をするのかというと、贈り物に呪術がかけられたものが交じっていないか調べる必要があるからなんだそう。魔法が存在する世界では、こういうことがあるから大変だよ。ギューゼルバーンがどうなっているのか、詳しいことは教えてもらえずにいる。

もしひどい怪我人がいるなら、私が治したい。私なら助けられる命があるかもしれないもの。

だけど原因に私が関わっている以上、そんなことは言えない。

ギューゼルバーンの国民だって、私の顔なんて見たくないだろうしね。

それに私がそんなことをするのは魔王の行動を批判するのと同じだから、しちやいけないってレオン殿下に言われた。

政治的なものが絡むと私にはもう理解が追いつかない。お子ちゃま美鈴には、そういうのはさっぱりだ。

半身候補のためとはいえ、魔王がヒューマンの国を攻撃したことについて、誰一人非難する声を上げないのは、私の感覚からすれば異常だと思っ。

この地の人々は、魔王の狂化の時に街が壊されても誰も怒らない。『そういうもの』と受け止めてしまう。だってガイア神と魔王は繋がっているから。魔王も神様みたいな位置づけなのだ。

だからこそ魔王が統べる魔界はこの箱庭の頂点だし、魔界からヒューマンへの連絡は『通達』だったり『布令』だったりする。

『ガイアの奇跡 第二章』公表の翌日。

城の客室で待っていると、ゴゴゴと結界が大きく揺れて軋む音が響き、数人の魔族達が転移してきた。

今日は各方位への、八公からの通達の日。

コルテア領主にも、ガーヴさんが事前に伝導話器——声を伝える魔道具——で、魔界からの通

達がある旨を知らせている。

だから、城内にガーヴさんが転移してくるのは、あらかじめわかっていたことだった。

そして、領主への通達より先に私に会いたいから、この部屋に転移してくるとも聞いていた。だけど、強大な魔力を持つ者がいきなり部屋に現れると、わかっけてもびっくりするよね。

護衛の青騎士達も、一瞬剣に手をかけて身構えていたもの。

閉じた結界を押し開き、虚空からいきなり現れたのはガーヴさんと二人の魔族だった。

三人ともすぐく大柄で、並んで立っている様子は壯観だ。一人は獣人らしく、頭に獣の耳が生えている。もう一人はヒューマンとほとんど変わらない外見のせいで、見ただけでは種族の判別がつかない。

二人とも男性で、どちらもきりつとした顔つきをしている。

それにしても、珍しくガーヴさん一人じゃなくて驚いた。その上、現れた彼ら三人が触れ合っていないことから、ガーヴさんだけじゃなく、あとの二人も空間属性持ちなのだとかわかって余計にびっくり。誰かを連れて転移するためには、身体に触れる必要があるのだ。

この世界には、光・闇・火・水・地・風・空間の七つの属性の魔法がある。そのうち、空間属性の魔法は、この世界の神様、ガイア神が許した一握りの魔族しか使えない。空間属性持ちは魔界のエリート。

そのエリートが同時に三人も、と考えつつソファから立ち上がる。

ガーヴさんとは『名奉じの儀』以来だ。

その節はお世話になりました、と挨拶しようと近付いた時、ふいにガーヴさんが床に片膝をついて私に頭を下げた。後ろに立っていた二人の魔族も同じように跪く。

えっ？ うそお。

あまりの衝撃に、ざざざつと後ずさる。

「な、何してるんですか、ガーヴさん」

あたふたと焦って声をかけると、ガーヴさんは私に頭を下げたまま呼びかけてきた。

「リイーン殿」

「な、何言ってるんですか、ガーヴさん」

ど、ど、ど……殿って、殿って。

「いつもみたいに話してください。びつくりするじゃないですか」

そう言うと、ガーヴさんは深いため息をついた。それからゆっくり顔を上げて、やっと私と目を合わせる。

「お前、俺を殺す気か」

えええっ……!!?

「わからぬか？」

少し考えてから、私はようやくその理由に思い至り、はっとした。

——ああ、そうだ。ガーヴさんはノーチェの臣下で、私はノーチェの半身候補だった。ガーヴさんが頭を下げているのは、私の後ろにいる魔王への敬意を示すためだ。

それを、私が拒否してはいけない。

「……すみませんでした」

睨みつけるようなガーヴさんの目は「理解しろ」と叱っているかのようだ。

うん。とりあえず現状は把握した。

私が今後ノーチェの半身となれば、八公第五位のガーヴさんより上の立場になるんだぞっていう

無言の指摘、ちゃんと理解しました。

レオン殿下にも言われたばかりだったのに、どうも実感がなさすぎてしっくりこない。

ガーヴさんだけの時ならまだ許してくれるだろうけど、今は他の魔族の人達もいるものね。今までのような態度じゃ駄目だったことだ。

「わかればよい」

ガーヴさんはもう一度頭を下げてから、ちらりと後ろの二人を振り返り、改まった口調で話し始めた。

「リイーン殿、紹介させていただく。この者達は地竜のヘクターと獅人族のラムデイス。共に八公第五位の補佐を務める者」

ガーヴさんの紹介の言葉に、名を呼ばれた二人が頭を下げた。

「お初にお目にかかる。八公第五位補佐、地竜のヘクターにございます。御目見得が叶い、恐悦至極にございます」

「同じく。獅人族ラムデイス。リイーン殿におかれましてはご機嫌麗しく」

紹介された魔族が、順に挨拶してくれる。ヒューマンと変わらない姿のほうが地竜ちりゅうで、もう一人の獣人が獅人族なのか。獅人っていうのは獅子しし、ライオンかな。言われてみれば、鬘まかみのような豊かな髪の毛だ。ふさふさの髪から覗く耳もライオンっぽい。

「リインです。よろしくお願います」

なるほど。ガーヴさん、今までは私用で来るが多かったし、仕事で来た時は極秘任務『名奉なほうじの儀』に関わることであったから一人だったけど、公式の場合はちゃんと補佐の人がついてくるのね。ということは、彼らは護衛も兼ねてるのかな。

さすがに空間属性を持っている魔族が三人も揃うと、部屋に満ちる魔力が半端ない。

それにしても、ガーヴさん達はいつまで跪ひざまずいているんだろう？ と考えたところで、私が「座ってください」と言うまでガーヴさん達が動けないことにやっと気付いた。

「ガーヴさん、どうぞ座ってください。皆さんも」

焦ってそう言うと、ガーヴさんはもう一度礼をしてからさっと立ち上がり、私の正面のソファに座った。その後ろを守るように二人が立つ。

あ、そうか。ガーヴさんの護衛も兼ねているなら座らないよね。

「リイン殿。謁見えつけんの間での例の件、我ら八公も感謝している。礼を言う」

『名奉じの儀』も『縁えんの者』も、箱庭のトップシークレットだ。部屋にはクリスさん達や、青騎士達もいる。それを配慮しての言葉なのだろう。

「私こそ、ガーヴさんにはお世話になりました。ありがとうございました」

「此度こたびのこと、各方位のヒューマンの街に八公それぞれから通達を出す。『黒の癒し手』はいずれ紫魂王の半身となる御方ゆえ、『黒の癒し手』に干渉する者は魔界が許さぬと」

今日はこれから、通達についての話をコルテア領主とする予定になっている。

その前に礼を言いたかったのだ、とガーヴさんは続けた。そして重々しい口調でギューゼルバーンのことにも言及する。

「ギューゼルバーンの件はお前には……貴女あなたには何の落ち度もないこと。気に病む必要はない。また、半身の安全を侵した者に対する王の怒りはすでに果たされた。この件に関し、かの国に我らが今後干渉することはない」

気にするなと言われても……

表情を見て私の考えている内容がわかったのか、ガーヴさんは眉根を寄せて言った。

「もし悔いているのであれば、今後は大人しく我らに守られていけばよい。貴女は、ただ、そこにありさえすれば、王は満たされる」

ひどい、そんな……

私の想いや人格を無視されたようで、反発しそうになる。……と、凜れんとした声が室内に響いた。

「ガーヴ公。それでは誤解を生みましょう」

後ろに立っていた地竜のヘクターさんが、口を挟んだのだ。

「発言をお許しいただきたい。ガーヴ公はこう申しています。此度の件は悔やんでも仕方がない。

だから悩むことはありません。しかしながら今後もし同じようなことがあれば陛下が、そして

我らが黙って見ていることはありません。ですので、ご自身の安全を第一に考えて行動してください。……とは言うものの、陛下は貴女様があるがまま暮らされることを願っていらっしやいます。貴女様の行動を縛るつもりはありません。身の安全は我らが守りましょう」

「そう言った」

ガーヴさんがむすつとしてヘクターさんに文句を言う。

「そう聞こえないから申し上げているのです。公のご説明では、リイン殿に伝わりません」

ヘクターさんに続き、獅人族のラムデイスさんも口を開いた。

「王は頂点。王は至高。唯一絶対の存在。その傍で陛下のお心を癒して差し上げられる存在は、貴女様しかおられぬ。我ら魔族すべてが貴女に感謝している。どうぞそれをお忘れなきよう」

ガーヴさんは、さすがに先ほどの言葉では説明不足だったと反省したのか、再び話し始めた。

「王が選んだ貴女を、我らは歓迎する。今後、魔族すべてが貴女の味方だ」

ガーヴさんは宣言するかのようにならうと、それに、と言葉を続ける。

『黒の癒し手』は、他の癒し手が匙を投げたミリーの病を癒してくれた。俺は、癒し手としての貴女にも感謝している。貴女でなくては助けられぬ命がある。だからこそ、俺は貴女に改めて誓う。

『黒の癒し手』は必ず我ら八公が守ると」

ガーヴさんの言葉はとも力強かった。私は自然に笑みを浮かべて頭を下げる。

「ありがとうございます」

同じ日、各地の城にもそれぞれ八公が通達に訪れたらしい。

こういう魔界からの連絡事項は、主要な街にだけ八公が自ら訪れ、近隣の村や小さな街には領主から連絡を行うのが常だとか。

コルテアはファンテスマでも大きな街だから、今回のようにガーヴさんが直接来る。このあとはグランマチスにも話をしに行くのだそうだ。

面会の最後に、ガーヴさんはこう言って部屋を出て行った。

「後日ミリーを連れて参る。魔界のこと、この地のこと、貴女にはまだまだ知るべきことが多い。少しづつでも構わぬ。魔界を、魔族をもっと知っていただきたい」

「ありがとうございます。ミリーさんに会えるのを楽しみにしています」

テレビや新聞なんてものがないこの世界では、情報の伝達には結構な時間がかかる。とはいえ、魔界からの通達は八公がそれぞれの方位の主要な都市に同時に行ったのだから、単なる噂話とは比べ物にならないほどの速さで広がっているらしい。箱庭全体に情報が行きわたるのも時間の問題だろう、とヴァンさんが話していた。

実際、コルテアの街に情報が広がるのは、あつという間だった。

今回の魔界からの通達と、同時期に公表された『ガイアの奇跡 第二章』は、どちらもコルテアに住む『ガイアの娘』に関することだからね。街の人達が話題にするのも当然か。

そして、ガーヴさんがコルテアに来た日の翌日。